青山御流
活花手引種後篇
二

實相院大浛主

紅枝芳馨出
重幔紫蕊離
披延硯池金

寵玉鮮春萬
壺天向風雨
不曾去
癸丑之歳二月書

義賢

寵玉鮮春萬
疊人間風雨
不曾才

癸丑之歳二月書

義賢

活華手引種　巻之二

壽朶園水谷有雅著
男　錦章亭逸雅校

懸瓶花体本源之事

〇懸瓶の花体ハ本源置瓶の行よ花体より變化してなれる所なれバ真の体なく行草のミの体なり故ニ置瓶の花体を正格とし懸瓶の風姿を権格とせりされバ大書院床或ハ貴人招請の節等ハ必置瓶ニ限るべきなり又懸瓶ハ小座敷茶室獨樂等の節其時宜ニよろしく用ふべし尚會席抔ニてハ殊ニ其集列の位置ニよりて取合すべし

御當流懸瓶の規則ハ何とても正風雅整の本格より轉化なせるなれバ是を學ぶニ先置瓶の花を習熟して後懸瓶の花を修錬すべきものなり。すべて懸瓶の花ハ手軽きものなれども正格たる置瓶の花を先ニまなびて而后ニおのづから権格の懸瓶ハたやすく妙所をうるものなり

〇置瓶行之規則陰陽骨体之圖

御當流花体の規格ハ其根元を北ニ配して是萬物自然の理也故ニ右旋左旋の形状をなして陰陽の花体爰ニ本源を顯す。

此体西南東北ニ旋る則右旋の姿ニして陰也、草木蔓艸をはじめ萬物皆此旋の方陰性なり、非勝手といふ但陰の床ニ置位なり

此陰の床といふハ逆勝手の床の事也、なれ共委しくハ早やまなびに出

此体東南西北ニ旋る、則左旋の姿ニして陽也、本勝手といふ但陽の床ニ置位なり、

陽の床といふも本勝手の床の事也、

右置瓶陰陽の花体を轉じて懸瓶の体となれバ是則經緯の理なり。
すべて天地間にあるほど有ものの皆此經緯のそれぞれに合離反對の有もののごとく。
置瓶の花体ハたてなり。又懸瓶の花体ハぬきにして。両体則横立の反對と知るべし。
また本勝手と非勝手の花形ハ順逆の反對なる所也
尚經緯反對に傳多し事繁ければ爰に贅せず

懸瓶非勝手之圖

置瓶の非勝手を轉じて靡なる形状なり

此体右旋の姿にして陰也、即逆勝手の床にて挿べし、

右旋左旋に体用の差別あり体ハ草木自然のをいふ用ハ人の視る所をいふ也体の左旋なるものを用より見れバ反して右旋と見え体の右旋なるものを用よりして見るときハ反して左旋と見ゆる故に是を誤るもの有今此圖ハ本体の左右旋にして萬物皆是に等し思ひて迷ふことなかれ

同本勝手之圖

置瓶の本勝手を轉じて靡さる

此体左旋の姿にして陽なり、即本勝手の床にて挿べし

水際の振様両体ともに置瓶の花体と同じなり、又花枝の疎密に應じ、三枝五枝或ハ七枝に配して、屈伸變化限りなきもの也

凡て懸瓶の花体の旨趣といふハ。深山高岳の巖崖そばだちたる所に生成せる草木の自然に枝葉を垂しも。或ハ蔦かづらの生下りたる形容を本據とし。僻郷離屋の閑庭に這ひまつはりて。おのづから藩籬になびき打越したる姿なぞを摸したるものなれバ。其梢の長じたるも。靡て下に

有ども即一体の主枝にして是を懸瓶の体にいたりても長くたれたる梢をさして天の枝と称するなりそれ天は虚空をいひ又日といふ天は上をさしていひ地は下をさしていふ事和漢古今の常則なれど天の地を覆ふ日の地球を運旋する視動説によりていふ時は高山に登りて日の出入を眺望するに我居所よりは遥の下にこれを見る又平居にして是を眺むるに横斜に見ゆ然れども日光漸高く昇て盛大なるの時に至りては何もよりも是を頂上に見るなり故に活華の正格は此規を則として三才を置する懸瓶は権格なるがゆゑに正格に反してかの日光を下に眺て横斜に見るの則を以て規とすされば屈曲して下に垂も伸て横斜に靡たるをも天の枝といへる事当に此理によれると知るべし

懸瓶行草六体之事 并 變化六体之圖

○懸瓶の花体は行に三体草に三体の規則ありて行の三体といふは相靡載靡逆靡の三段なり又草の三体といふは大流し惣流し乱流しの三段にして此六体を熟得すればいかほどむづかしき枝ぶりなりとも自在に花体の調ふものなりまた懸瓶にする竹器銅器籠瓢等の数品ありてさまざま異形のものもあれども右六体の活動を手錬して花と器の相応する所を専一に心得べし（但竹器などはふくらみて細き、、切方などさまざまの姿有て銅器籠などへ等それぞれ形容さだまりがたし）されば左にあらわせし六体の圖へいささか骨法の瓶器に相応する所の大綱を示せしのみにして猶草木の活形疎密屈伸等は花枝を以て弁へざれば委しく明らめがたき所なり（但し懸瓶の圖は早）

さきし五編の附録ふ
数体をしるし置つ

懸瓶ハ先ふいへる如く権格ふして畧儀なれバ正禮の節抔用ふべきものふハあらざれども小座敷の釣床或ハ平床（平床といふハ置床のことにて床柱ハ通りをかべふ附たるをいふ也、）抔ふてハ来客多く花瓶床の上ふ居らざる時ハよぎなく二幅對等の中央ふ懸花のことを用ひて大畧ある事も有べし其節ハ登り相靡といふ体を挿べし是ハ相靡の一格なるが此体ふ限りて三才を正格のごとく置事深き口傳あり是祝儀向等ふ懸瓶を用ふる時ハかならず此登りの体ふ挿事なりと云なり

紅透臙脂千種蔓

○登り相靡之圖

心

相

載

芳濃錦繍萬枝葩

壽栄園 有雅 書

圖のごとく二幅對の中央ふ懸瓶をかけて入る時此体ふ限るもの也、但懸瓶ハ坐て見る定格なく見ゆる所のすべて心の乗前へ靡く挿方習と知るべし

右登り相靡を懸碗の内の別格にして。真に通ずるの体なり故に本勝手非勝手ともに置碗の格に準ず又心の梢は正面より見て根元に納る様に挿べし
但し行の相靡は此けぢめにならず

○行相靡之圖

○花によりて器に應じて挿方多しといへども懸物を省畧し胴釘に懸て花を入るときは多分此姿よし
○木ものを此体に挿ときは心を登らしむる事有べし
草ものは多分惣靡にいれる方よし

○載靡之圖

載靡を懸碗専要の規格にして。木ものの草ものゝ共に此花体に挿ときは。花器は大際取合ふものなり
但し横懸にしても正面懸にしても。此骨体に習て手錬すべし
山吹 萩の類此体に入るゝときは風情もよし

右床柱の釘に横掛にして挿ときは。花枝床ぶちより前へ出ざる様心得べし。心の梢を懸ものゝ方へ振りて挿が趣意なれども。花枝の模様によりては少し前へふりても苦しからず。但し床縁を限りとするなり

○逆靡之圖

此花体ハ長き姿の花器又口の廣きものハ於ふ入る事不取合なり。口のせまき器ニ挿て。風情格別おもむき有なり

圖ある所の垂撥ハ張床又ハ會席等ニ用ゆるもの也　張床ニハ是非垂撥なくて叶ハず委しくハ早けしニあらハせり

右行の三体并登り相靡等の規則ハ何れも木ものの草ものニも勢ひあるものゝ風情ニよつて尚性容ニ應じ聊差別有也最此修錬肝要たるべし又蔓ものゝ類凡て大靡のものハ次ニ圖ある草の三体を以て習熟すべし

○草之大流之圖

○總流之圖

○次条ニ云柳釣より入たる圖なり凡て長く垂るゝものハ此挿しニ准ずべし

○總流しハ前隅脇隅の間ニ出て枝先自然のまゝニ靡下り登り静つて枝をきをつくるなり
但し自然の曲枝等有ときハその風情見ならひいるべし

連翹ゆきやなぎの類
出生枝先靡垂るゝものハ何れも右の両体ニよつて挿べし
但し懸瓶ニ限らず釣瓶手桶等ニも此風格格別取合ものなり

○乱流之図

乱流しの体ハ蔓物ニ限るなり紫藤牽牛子つる梅もどきの類何ニても此風情ニ挿こともし。但手附の篭ニハ蔓ものを入ざる事御当流の古伝也今図する所ハ手篭の携子足あれどもこハ猿竹といへるものニて蔓ものを入るゝ節別ニさし添て用ふる具也右口伝あり又柴萩等を用ひて風情をなすも又有べし

○蔓草ハ花葉よりも其の花器より生ひ出たるごとく見ゆる別伝あり

蔓ものの纏ふ其本性によりて右旋左旋の差別あり右図する所ハ左旋の纏様なり凡春分より秋分の比まで生長するものハ右旋なり又秋分より春分ニ至り隆冬ニ衰ざるものの或ハ木ものの類ハ何も左旋なり但藤など白花のもの右纏し紫花の方左纏なり又牟乳ニも右纏左纏のものあり又北五味子等ハ各其葉凋落し春新葉を生ずるものニして左纏なれバ各其性容を正しく明らめ知るべきものなり

右真の相靡并行草六体の規則二重三重等の器ニ応じ其変化窮なしといへども猶転格の準縄となしぬべきものの五体を左にしるせり此十二体の規則を深く習熟すれバ何程異形の花器又難枝難花ニ向ふとも奇活自在をなして全くとゞこほる事なし将釣瓶釣船等の趣も大旨此規格によりて風情を為べし。但釣船ハ出入遠近泊船等の差別ありて尚習ひあり早はし略伝といへども置たれバそれを見て会得すべし

○登り載靡之図

二重切三重切等の上或ハ船の類此花体最よし

○亂總流之圖

此体乱し流しの風情𥫩竹用ひずして挿入る姿也尚假枝を用ゆる時ハ差別なり

○濯流之圖

此体惣流の体を木ゟの杯やく挿時の風情也水の流も行くなりそれよりの物かふれ濯勢ふの意ふく濯流といふなり

右十二体の規格書院會席等にて挿ときは美麗を専要とすべし。又茶室草庵等にて抛入となすときは侘を主として幽雅の体を顕すべし是等の餘情と花枝前後のあしらひ等は口傳にあらざれば委敷明らめがたし。此花体に美麗を顕すと幽雅を具すとは唯習熟の術に有のミ

懸瓶之釘之事

○床の懸瓶の定まる釘といふは中央の胴釘と柳釘の二つのミ也今床柱にある釘を懸瓶の釘と心得るは誤まる也此床柱の釘ハもと花ハ懸ずして客の休息するとき烏帽子を懸置釘なり。此えぼしかけといふ事源平盛衰記に見えたりとぞ伊勢貞丈翁の説あり又是をでんがけといふ 但し婚禮の節抔ハ相生の守りなどいふを懸る事なども有て守り釘ともいふなり。常にハ香佛抔をも假にも懸る事有べし。併此釘に瓶を懸て花を挿ことあるハ古き事にして。茶室にてハ別て是に花器を懸る事定法のごとくならぬ今ハ座敷向にても此釘に瓶を懸る人多かめれバなり。夫ハ知れども凡て掛瓶の釘やいふるものなくとも貴人方にてハ茶室の外懸瓶を用ひたまふ事なしされバ祝儀向などにて禮儀を正しくする節ハ必思量あるべき事なり。但し茶室にて祝儀の節なり共用ひてくるしからず又床脇の上座の方なる柱に釘打事あり是ハ短冊懸抔を懸る釘にて近世のもの也是にハ妄しく花瓶を懸る事はあるべからず床の銅釘ハ瓶を懸るための釘也又柳釘と云ハ靡き垂るものを挿時に用る釘にて。柳ハ垂るものの内にて最上のものなる故かくハなづけたるもの也又朝良釘といふ有。是ハ利休の物好にて草菴に限る釘也。此外に釣船の釘あり早教諭の二編に著し置たる故了もしろ因に云今他家の書に懸瓶の花を本源として

置瓶の縦を論ひあるハ懸瓶の竹器を頼しく他の竹器に切方の墨法を及ぼせバ抔其誤り甚しきもの也
此書院に懸瓶の釘のなき一条によりてもその畧儀なる事の確證とするべきものをや

右懸瓶花体規則變化之傳畢

花配起原并時世沿革之事

附 抛入名義之事

○花配ハ花形惣態の締めにして根元なれバ枝葉整ふべし。故にこれを最要として其流徒ことごとく是に心を盡すといへども。いまだ其的論なるものを見ず。依て當御流に傳ふる所の留方の要を左に著して。初學の為に便ならんとす。さて花配の諸説まちまちにして。古へ冠の并びて留たるを起源也といひ。又ハ琴柱を始とし。或ハ失箸の先を折添留し抔其義論多しといへども何をもて正しき證しのなき一家説のみにして後に附會せしものならん。思ふに古へかゝるいやしき事ハ有まじくこそ。これハ余が汲つる青山の御家に此説どもの御傳のなきにても炳然なり

かくいふハ今諸の流儀より出て何をもて其基を古く尊くせんとて、種々の強言とのゝいひなせども、活華の御家しいふハ我青山の御家の外にハ假にも知らぬ事なく、御家の古き御傳籍に見えざる事ハみだりに言のこ世に多かりまして此花配起源抔の説ハいふもさらなり、しかし妄言なるをや

今茶家に抛入といふ辞ハいと古き言葉なり。此抛入といふ事ハ千宗易小田原陣中にて薮子花を入る時に柄もなく根元をけづり貫き水盤へ投入しより始るといへる亂附會の説にして取るにたらず。此なぐるといふ辞ハ古くよりものゝ名を精くせずして唯磊落にけし置辞に用ひて物をなげ捨る事のみにハあらず。なげけることなれり

有正初年の比此抛入れの義を考へしになげいれハ靡入れの義にて花体を靡て入る故になびきのきをけに通じひを畧してなげ入れといへる轉なり

なさんと思ひしが是をよく思へバ附會なりし　かくんに花を挿事ハ上古より有けらし
併し今の抛入れのごとき此義に叶へるにあらし
なれバ今のごとく挿法の厳なることハなくて唯手折たる儘をさしよく
瓶にさしし花の色香を旨として愛玩びたるものなり　中昔の頃より手軽く入たるを唯俗言に抛入とよび
（瓶に花を挿といふ事ハ古今集拾遺集等に見えたる伊勢物語にハ客の設に花をいけしなるべしと見えたり）
ならはしたるを今猶いひ傳へて唱ふるにこそ。鎌倉に北條の權を執られし末より。室町殿の頃に床といふものの出來て。鹿苑院殿の銀閣に退きて風流を好みたまひしより。活華立花盆山茶香等の伎も専ら行はれ來り。（床の事ハ續後編床飾の条に委しくいふべし。又活華盆山茶香等の起原ハ各遅速あれども室町殿の前後におこりて世にひろくなり我御家の中祖の君さかりの頃に流行たまひし）　されバ瓶花の法則厳になりて活華とも抛入とも二稱も出來たるものなり。されバ古へハ花配とてなく。今の文人風抔

いへるはさまに挿入たるゆゑ。されバしまれるに一文字。杈等を用ひて留たることも有しなり。今茶室の花ハ花配なく古へげにさまに挿入る故に。猶抛入れと唱ふるも此義也。（今の世ハ諸事礼義厳になりたれバ書院座敷にハ段ある抛入とて唱ふる事有べからず。茶室ハ礼を正くせずして風韻を旨として賓客の尊卑を論ぜず。燕楽するの設なれバ抛入れと唱ふるもまさにさもあるべき事にはべりなん）　但茶室の花とても。口の廣き器にハ一文字を用ふるなり。強て花配あるの起原をいはゞ此一文字をこそ根原といふべかりけれ。（古へ花配りなき時ハ折入れといひて根元を折て留たる故に抛入れといはずして折入れといふべしといへるも是まさに妄言なり）　此一文字より十文字となり。又換へて杈ともなり。松葉配りともなり。尚さまざまの配となりしハ。漸元禄寶永のころより。寛政文化の頃迄の事になんはべりける

留方圖解并花配用様滋器心得等之事

〇文雅瓶花之圖

今俗にいふ文人風の挿る也いにしへの質朴なる体大旨かくのごとし

〇折入レ留之圖

折入れは他所にて花所望せられし節圖のごとき花器にて花配なく留りがたき時抔に用ひて即興を添る事なるべし

〇此折入はなり強く留るなり 但添枝二本より餘は留アらず

〇花配なく抛入る之圖

配りなくして留るは圖のごとく二タ所の持合にて枝木を留メ、其餘を是に添せて留るなり、掛花の類もすべて器の口にかくる所にて前へ靡せて撓置ときは速に留るもの也

〇一文字留之圖

圖のごとく口の廣きものを一文字を入れて留るなり是も右の花配なくして留ると同意なり 但し一文字を強く斜に撓し

圖のごとく留るを半月留といふなり

○十文字留之圖

右の一文字より十文字と換る事
あんべく世にひろまりの自立て
なるげる理にして必陰陽の合して
成就するなれば此十文字にしても
たしかに留なり

此ごとく十文字にまた後より一文字をかけて留るを
扇留といふなり
但し扇留は青竹を以て製すべし

右十文字轉じて杈となり其杈に廣狹の差別ありて根締するの
丸くなるもの前後にそろひて留るとの二品ありなり

水仙抛入れの風情なり

○杈にて丸く留たる圖

杈は内すごを火しくづりて
用ふれば留よろし
併しこれは初心の
なすわざなり

○杈にて前後にそろへて留たる圖

配るは花留とも
根締とも又花配りとも云

杈の木はそこのかきりの又をくべる
ものは杯耳しそれば木槿の木などよろし

右のごとく年うつりて。花配漸備りぬれば亦是に附會をなして。瓶中を五行に配し。其外種々の理をそへて。或は瓶の傍より挿。又は中央に挿四候に挿所を換る抔いへる強言をなせるもありて。是皆正しき傳へにはあらざる也。今 御當流にては松葉配又は杈といふ配をいへるを専らに用ふ。此松葉配といふは。[図]圖のごとく丸木を割懸て松葉のごとくひらき用ふるを云。但し松葉配ハ千代の緒をかくるといふ 結ひとむる人是は故實あることぞかし 又 [Y]圖のごとく割懸て製したるを琴柱といふ。これは前を結びとむる事なし。此琴柱のしるしは御當流にては好まねば是を用ふる場に至りては則杈を遣ふなり。但し松葉配りは割懸るものなれば留まりよく。杈は丸き枝なる故おのづから留りかたきまゝ松葉配りに劣れり

松葉配にて留たる圖

○松葉配りは多く向ふに附る也但花によりては隅附にも遣ふべし

此配りの木は木槿か歴木の類よろしく木理の通りたるものを撰て用ゆべし

又ふたまた配りといふは杈の[図]此ごとく三條なるものより起りしかども。凡花配りのはじめはまづかくのごとくなれど。古義を失なはじと殊に留り安きはこの配りに次ものはなき也。但し製様は筋のよく通りたる木を三ツに割て。即二筋に花を挿なり。尚この製は口傳なり

ふたへ配アていふ我　御家の先君根留りの伎ふ深く御心を尽し
給ひはじめて此配りの製を考興しのひしなり其後別て當
御流ふ専らと用ふることハなりぬ　但此配りを用ふる功ひることふし最
多し其ハ木と草を取合して挿ふ必此配まを用ふる時ハ水際の差別
殊ふきハ立ていさぎよく見ゆるもの也又花をとちやむふ留り安ければ自然

三椏ゆへ留たる圖

三ツまたハ八重またなり

養をなさけれた古義ふ叶ひて根締ある美麗を顯す等餘ハ猶此配りを
手錬して其妙要を會得すべし　但ふたへ配りハ枝數多く挿時ふ用ひ少き時ハ松
葉配りを用ふべし

二重配ゆへ留たる圖

此配りハ二筋なるゆゑ右の方へ挿枝ハ
右の木肌をたづ

左の方へ挿枝ハ左の木肌を
たづりてよく締るものなり

此二重配ハ草木
ともふ數本さし
て自在ふ留る也

近世右の二重配りふ據て溝配又藥研配りといふ・いやしき配まもと

なしぬ此溝配りといふ　かくの如く製したるものなり藥研配りをいふ　此ごとく丸木を割て上を廣く下を狹くなして中に竹木或ハ鉄のうすき板をはさみ前後をはりがねにて縛る是に根元を削て一本ばかり挿もの也是ハ配りの本來を失ふもの也溝藥研等の名を負せたるハいふまじきひがこと也配りの前後を縛るハ瓶史にさへ忌以縄束縛也といへる根を縛りたると同じことにて是等の配りハ假りにも用ゆまじき事ぞかし

・猶此外に箱配りといへるハ同様の製也用ふべからず又引配といふ有是ハ丸木を鋸をもつて引切その細き筋へ花を挿もの也拙しといへども藥研配等にくらぶれハやゝ勝れたるものなり、

御當流にてハ右の松葉配・杈配・二重配りの三等を用ひて其餘古義正しからざるものハ用ふる事なき也　又相生配といふ有是ハ婚礼などの用ゆゑ常に用ふる事なし他家に井筒留といへるハ此相生配りとうつしとれるものなり

右の外種々の配りハあれど大旨是等の配りによれるもの也

○凡て花配りハ花を留るの要めにして花体に應じ器に應じてその留り様一定ならねバいろ／＼程花体を工ミなすといへども根元留らざる時ハその功全からざれバ前にいへる留方を常に克習ひ深く心を盡すべきこと也尚又幼學の爲に留りがたき磁瓶の差別を聊左に附録ス

中底を入たる

中底に此ごとく竹にて製し落し入て用ゆるなり

圖のごとき磁瓶ハ花配りもくべりて留りがたし陶器なれバいれたく入るとまなしがたし底逆花を挿ときハ留れども丈長きもののにいけられバやがて尤草木ものに小ぶりのものハ手がろく留まれども大ぶりになりては重さにたはむゆゑに留りがたし此時ハ圖のごとく瓶中に中底を入置て入る時ハ速に留るなり

圖のごとき磁瓶もまゝ留りがたし、枝なく留る時は前圖のごとく中底を入てよく留るなり、又二重配りにて留るは中底に限らず一文字を配りの下へ入てもかたく留るなり、なるべく配りのゆるみて留りがたきは二の一文字にてよく留るものなり、

圖のごとき器は前編に見えるごとく薄板を落し入る哉、又口のひろきは奥に圖のごとき無関人を入れて留ることよし

なべて底のひろきたるものは早くはなし既に初編に著したるごとく薄板を落し入れて配りを留る事よし

磁瓶或は竹器の類内の塗たるもの配りをかけて留らざるは締賦木を前後に當て配りを収むべし。其締賦木は今西洋船來のコロツフといふもの甚よし

右の外方形の花器にある枝を用ゆる事よし。松葉配りにて留まり易し、但し銅器のものはかたく配りを入れば損ずる事なければ松葉配りにするよし、唯陶器は配りをかたく入れば欠るもののゆゑに枝をもちふるをよしとするなり、又塗たる花器も右の締賦木を用ゆる哉或は前後に紙を當て紙をひらきは傷しの又薄き板を當て配りを収むべし。かくすればはなれえげぬためなり　て留らばかいふるれはひらけるもののぞかし

平鉢水盤等の瓶中留方之圖解

○水指に火架留之圖

火架にて留るハ一文字
にて留ると
同じ意也、
圖のごとく根元の當りを
火架の輪に當る所の呼吸にて留る也

右ハ火架一ツにて留たる圖也、
猶二ツ三ツも圖のごとく組合して
遣ふ事有べし
但しごとくハ夜學の具
なる事ハ早教
諭に出せり

太き木ものハ圖の
ごとく火架に切り
かみて
留るへし

○蟹留之圖

蟹ハ足を器のふちにかけて
留るなり、向ふへ懸る
ことも又横に懸る事も
あるなり、時宜に随ふべし、
蟹陰陽の置やうたゞ早わかる
やうにしるしおくべし

○一閑人無閑人之圖

○一閑人

一閑人ハ則墨臺也

。無閑人

此蟹ハ陽の置やうたる也

。枝の屈曲に
より變化はかれどもことごとく
筆工に盡しがたし大旨圖によりて考弁すべし

太き木もの抔にて配り居らがたきときハ
圖のごとく板に仕込て紐にて留る也、
但し次に図ある井筒ハ隅にて板へとむ也、

井とのぞける閑人なき故に無閑人といふ

○無閒人にて留たる圖

幹にてきものを留るには圖のごとく木肌を切りこみて収むべし、但根じめ杯を添るときはこの幹の根留りに配りを入れてその配りに根じめを挿べし、かくすれば幹もいたしかに留るもの也、

○双井筒

ならび井筒にてふと蘭がまの類の水草を挿折に用ひてよし

○筒井

筒井は取扱ひも無閒人に准じて用ふべし、但菊ぎくの類を挿節も常のごとく配りを入れて花を挿べし

大小ありて花に應じて用ふべし

○轡留之圖

轡の組方は早教諭に出せりなるべく瓶に懸て留るものは隅に懸て留り安き也、但轡は組方によりて瓶の中より挿事有也

此所砂鉢の隅へ懸ル

○環旋水留之圖

環旋水の穴へ一本又二本或ハ三本も挿也

環旋水は水草の類を留るによし、穴中詰りの杯込べからず、穴廣くして寛き時ハ根元を少し折て挿べし、風吹の席とても流るゝ事なし、是すなわち折入れの法なり

右花配留方之傳畢

右ハあらましを記といへども、餘ハ花枝を以て手錬あるべし、なほ鋏留砂利留等もあれども早はやしに著したれバ爰に畧せり

二木三草五葉之辨并准種之事

○草木鑑古専要のものハ前に桂月園泰雅撰で二木三草五葉を挙たり其二木三草といふハ前編に見えたる梅山茶の二木菊燕子花水仙の三草にして五葉といふハ一葉玉簪花䕡吾胡蝶花萬年青乃五種をいへり有雅これを研究らるに二木三草ハ尤修行の肝要とらるべきものなれバ五葉ハいまだ盡さゞる所有なりまづ五葉の内玉簪花と䕡吾ハ一葉に准ずるもののごとく胡蝶花ハ花はやめ鳶尾等に類して燕子花に准ずるもの也されバ一葉と萬年青をこそ旨と手錬らるべきもののなれ此二種ハ四候ともに生栄えて最世に多きもののなれバ専ら是を習熟して餘ハ此修行をもって推らるべし又葉を旨とするものハ常盤木竹をはじめ水草の類猶多かりその同類別種の差別をよく辨へ置て其主たるものを専らと手錬らるべきなり

○紫苑玉簪花䕡吾是等ハ一葉に准じて何れも葉を組て形態を調ふるものなり（車前おもひ草の類葉を組ものハみな種類なり）又曇華 芭蕉 紅蕉 鬱金 蓬莪茂 高良薑 良薑等ハ同じくばらんに准ずるもののごとく是ハ一葉で葉を組て体をなすもののにハあらざるなり

○萬年青ハ品位餘種に秀て性容是に類するもののなし

○常盤木にてハ松を冠として五鬣松に准ずるものの最多なり華陰松 栢 扁栢 檜栢 刺栢 槙 樅 栂 榧 伽羅木 柾の類何れも松 五鬣松の意を以て修行らるべし（尚常盤のもののにハ椶櫚等性容ことなるものの是等ハ葉を旨とするものなるゆゑ餘常盤木にて）花に用ふるものの数種ありといへども今枚挙するにいとまあらず依て爰に畧す

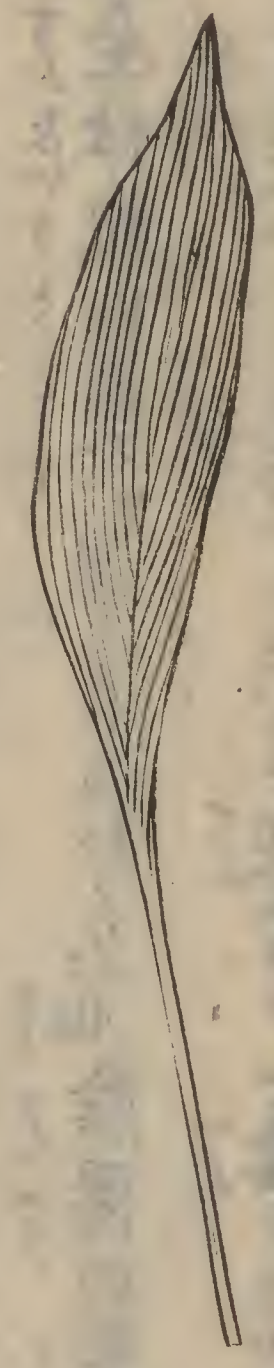
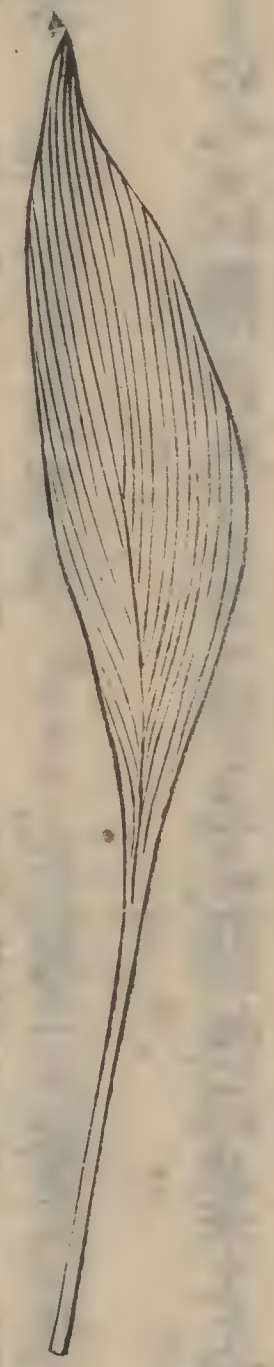
○竹に一種別品ありて　淡竹　苦竹　孟宗竹また金絲竹　人面竹
篔簹竹　紫竹　鳳尾竹等の類その差別ありといへども何れも葉の疎密
によりて風情をなせり也尤竹の修錬をもつて草木に其拔を及ぼす
ものの數種あり

○水草の風情はまた別格にして蓮　萍蓬草を以てその主とせり
澤瀉　蘋草　一瓣蓮の類是に准じて性容を調ふものなり。なかれ
水草の種類多しといへども葉を旨として風情をなせるものはこれら也。
されば今此五種　竹　水草　常盤木　を以て瞽古の專要に備ふ　但し蘭
吉祥草　山蘭のしらん　芦　荻　かやの類　これに次　此外常盤木にいたりては
萱草等何れも蘭に准じ　芒　何れも芒に准ず
しかして常盤木に准ずるものの葉を旨とするなり　おしき木　もみぢの類　又椶櫚ふじまつの類其

性容別ありして葉を專すらとするものも有といへども。すべて右五種を
修行する時はおのづから自在を得るものなかし

一　葉本性陰葉陽葉之事　并　組方之傳
　附　准種五草之圖解

○だらんは本勝手と非勝手の風体によりて先第一に葉の性の陰陽を正し
ぞし其本勝手といふは陽の体なるゆゑに陽性の葉を旨として陰
性の葉をまじへ又非勝手といふは陰の体なるゆゑに陰性の葉を旨とし
て陽性の葉をまじへ挿なりとを正しく備ふる時はおのづから
性容をなるなり。全体規則速に調ふものなり。但陰陽の葉といふは葉の
形態表より見て左旋なるを陽といひ右旋なるを陰といふなり

〇陽之葉

葉の形態表より見る中のすじより右の巾狭く左の巾ひろきハ則左旋のすがたなり

〇陰之葉

陰の葉のすがたハ中の筋より右の巾ひろく左の巾せまし是則右旋のすがたなり

〇萬物北を根元とする理ハ既ニ先ニいへれバ弁へ知るべし

右葉の性ニ陰陽を定るものハ諸鳥の翼の形容ニよりてなり其理を

窮むべし

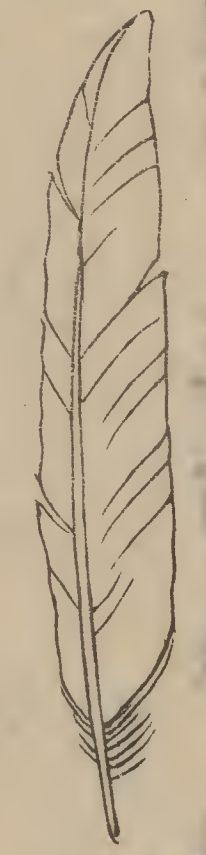
陽

鳥の左の翼羽ハ此ごとく中の筋より右の巾せまく左の巾ひろし則ならんの陽の葉とおなじ姿なり

陰

同じく右の翼羽ハ此如く中の筋より右の巾ひろく左の巾せまし是まさるならんの陰の葉ニ同じ姿也

およそ禽獣草木ニ限らず萬物左を陽とし右を陰とす此ゆゑニ左右の翼の羽のすがたニならんの葉も脊合したるを陰陽と定る。最陰葉陽葉とハ地上一叢の中ニ生ひまじれども暖陽の地ニハ陽の葉多く陰湿の地ニハ陰の葉多く生ずる事天巧自然の理ニして敢て

辟論を以て争ひがたき所也 尚弓術の甲矢乙矢にしも此陰陽の性理を けんハ確證あれどもくだ〳〵しけれバ爰に省く

○本勝手陽之体五葉之圖

右本勝手の体ハ陽の葉を主として陰の葉を交たる陰陽全備の風格なり 但し本勝手の体に陰の葉を主とし挿たるも幼学の眼にて見る時ハ左のごとく差別なく見ゆれども此形態を會得したるもののよりして見るときハいと見ぐるしきものなり

○葉の表裏を陰陽とこころ得るハ自然の陰陽の性と反したる也 これ早教諭又活花図大成の附録に委しく著し置つ

○逆勝手陰之体七葉之圖

圖のごとく陰陽の葉を正しくして組時ハ花体聊も滞りなく自然正風体にかなふものなり

此ごとく葉の表裏をなさざれハ陰陽を混じ組ときハ蘘荷のごとく重りていとど見苦しきものなり 貌をなすべく考辨有べし

すべて葉ものを挿ふ数少く挿ときハ葉のむきを一九より二八ふ見るべし 一九といふハ九分平を見て一分横を見るなり 二八といふハ八分平を見て二分横を見るをいふなり 又数繁く挿時ハ三七より四六ふ見るべし 三七ハ七分平ふして三分横 四六ハ横ふして六分の平をいふなり 葉を真横ふ見ると真平ふ見る事を忌む。最葉ふかぎらずきのびある様遣ふ事肝要也 但し葉のびくきとハ曲なるをいふふあらず正しき容ふして葉の備へ全体整斉なるゆゑをいふなり、たとへ数葉挿しぬるとも曲葉ハ唯一葉を重ぬ葉先ふて曲をなしぬハ風格甚いやし二葉を過ぐべし自然の容ふして惣体過不及なく風情を調ふ事を旨とすべし

○本勝手陽之体九葉之圖

右の七葉ふ二葉を増したる活体なり、但し心ふ三葉、載ふ三葉、相ふ三葉を配さる事即九葉の定格なり

心
陽性
此葉四六ノ向
陽性
此葉二八ノ向 但直ニシテ心ノ葉ニ組合テ働キアル葉ナエラムヘシ
陰性
此葉二八ノ向
陽性
此葉三七ノ向 但小曲有
陰性
載
此葉二八ノ向
陰性
此葉三七ノ向
陽性
此葉一九ノ向
陽性
此葉四六ノ向
相
陽性
此葉四六ノ向 但シ葉先ハ心ニ向フ意有ベシ

右葉を組ふ心と相ふ遣ふ葉ハ大葉中葉をもちゆべし。又載ふ置葉ハ小葉を用ふる事よし。最葉先ハ何れも同じ向ふならざる様心得手錬すべし 但葉先を少しふくも切ちぢめ抔する事ハあるべからず

○右九枚に二葉増加して草の姿に入たる圖

圖のごとく挿たる体則葉の働き也

但陰陽の葉は花体に應じて差別有こと各圖によりて會得すべし又雅整体變化の規則に陰の体に陽の心葉を用ひ陽の体に陰の心葉を置事有是を反乗の格といふ尤働有体也併手錬熟せざれば是を挿得がたし則十五葉の圖左に記す

○本勝手反乗之格
十五葉之圖

右の葉組は唯定規の大旨を記すのみにして最四候に應じ葉の性同じからず三月の季より四月の始を一葉の時とす此頃は花と根の旁に置又嫩葉を生ずる時は習有几て器に應じて千變万化極りなきものなり尚委しくは一葉百瓶圖解といへる書に花圖數体詳也一葉はらんの正字にして過し文化の始め豫州の楠嵐園が撰たる百瓶圖譜といへる書の中より尚すぐれたる五十圖を撰出し天保の季年に新に又五十圖を撰添旁に其義解を并へ置たる書なり

〇一葉に准ずるもの五種の圖

玉簪花 五葉 二花

玉簪花紫苑槖吾の類ハ葉の組方おもとに同意なり花ハ葉の向ひ合たる中より出るべし 但車前ハ玉簪花に似て花の性葉の中より生ぜず偶生の傍より生ずるものなれバ是等ハ其性容を観究して右の葉組に准じ挿習ふべし

槖吾 二花 七葉

岡萍蓬抔ハ大旨此つはぶきに准じて挿べし

紫苑 七葉 三花

しをんハ葉を用る所へ花を置て風情を調ふてはるべし

紫苑ぎくハしるに葉の性弱きものなれバぎばうしのごとくハ扱ひがたし撓る葉抔ハ殊に強きをと見立て用ふべし

花葉撓方等ハ早教諭に著しければ爰に畧く

○曇華ハだんどくに准ずるものゆゑ二本三本五本七本まで挿葉の自然をたくはへなるなり。此花仲夏より初秋にいたりて世に多くあるものなれや安きものなれバ、芭蕉紅蕉等の風情を知るべし
まづ是を以て手錬すべし

曇華　三本

此花に同じ類のものハ何れも葉の大小取合して風情をあらはすべし
だんどくの性容并挿方撓様等、早川にして委しく記したれバ畧して右一体を顕すものなり

蓬莪茂　三本　二花　七葉

芭蕉ハいんせう所に此風情に挿てよし
葉のむき様ハいんかにひとしく真平を見る事なし

○高良薑 良薑ハ曇華に似て葉厚く強し。故に葉先靡くことなし。葉ハ前後のちがひもなく七三に見る様遣ふべし 但し数ハ二本より五本迄挿なり、何れも花図早けし にまつせり

萬年青性容之事 并 葉組之傳

○おもとハ陰性のものにして隆冬衰へず。その寿を以て名とす。三才図絵に出たり 専ら慶讃に用ふるもの也。其性容四候ことにして餘草に勝れたる所なり。葉ハ左右ならびに偶生ス。春心中より苞を萌し。其苞の中より嫩葉を發す。嫩葉生長するにしたがつて苞もそれ〴〵ひらく。その苞の内に蓓蕾を生じ心中より出るがごとく見えて。新葉と舊葉の間に花をひらく。即六辨にして黄白色也

但し辨厚く謝落せず 因に云水仙の性も四葉偶生のものにして心中より一茎を生じ六辨の白花をひらく。四葉六辨の陰数をとりて慶讃に用ひずとするハ誤なり。陰極まりて陽萌すの理にしてかつ厳寒の中に花さく見ゆるをもつて仙骨の名もあるなり。おもとに次ぐものなり。祝筵に用ひてよし

新葉立延舊葉に嗣て盛なるにおよんで實を結ぶ。實を結ぶに及んで即胎中に後芽を含む これ翌年の嗣芽となるなり。かく嗣て絶ざるめでたきものとして喜事にこれを用ひて祥瑞のものなるを以て唐山にても熨斗のかはりに口號とするよし秘傳花鏡に見えたり 實ハ冬に至りて熟するものとき舊葉ハおのづから枯腐するものなれバよく〳〵こゝろを用ひて挿べきなり

萬年青性容之圖

花ハ新葉と苞との間ニこれをはらむ

苞ハ二葉なるもの常性也、二葉なるものハ初生の苞ニ随ふて蓓蕾を生ずる也

本草新編云人家種此花更能辟祟云々

葉ハ新葉と舊葉と前後左右ニ年を隔て更り相偶して生ずるものなり瓶花ハ是ニ擬ふて葉を組むべし最よし

○本勝手七葉之圖　花の時の風情なり

圖のごとく性容を委しく辨へ得て瓶中ニ揷ときハ自然の風致を調ふものなり。但し花のさきたるハ枯葉腐葉等をまじへ揷事なりがたし尚口傳多し

○非勝手十三葉之圖

實の時乃風情なり

新葉
新葉
新葉
新葉
舊葉
新葉
苞
舊葉
舊葉
新葉
舊葉
舊葉
舊葉

両体葉組の圖ハ性容ふよつて挿所の大旨を記せしものなり。尚季秋より孟春ふいたる季候ふ應じて習最多しとする傳葉の位置新舊の活意等ハ悉く口傳ふあらざれバ辨へがたき所なり。是ハ御當流ふおいて重く秘する傳へなれバ爰ふ省けり。但萬年青圖解ふ委し

以る書ふ數体の規則を著しおれバそを閲して形狀の大綱を知るべくなん。右稽古專要の葉を旨とするものをえらみたる内、一葉萬年青ふ二種を爰ふ著はせし。常盤木竹の類ハ性容悉く一ならざれバ筆頭ふ及びがたければ省けり。但し常盤木の類竹の挿方等ハ大旨校正活花図大成の附錄ふ著し置つ。又水草の類も數種繁多なるを以て爰ふ擧ざれども又図大成の附錄ふ記しつ。餘ハ早教諭ふ著したればそを競花圖ふ照合して其大綱を知得るべし

青山の花みち下風世ふしたうて吹はじくなん千五百六万歳

活華手引　巻之二畢

瓶花者流各有其挿法若心費巧取其姿態
以供衆目之玩賞目謂之活花然而其活者豈
能耐久乎終無不損之時又無不枯々理偶已
其活久者不過十日或二十日久而不久不足以為
久也乎以謂必能耐久經百年而不變者則有
一焉何那挿而圖之鐫而帖々不論春夏秋
冬一花一木皆儲之於帖中雖非其花時而
開帖則其姿態現焉掩帖則其形跡没焉以
為有則有以為無則無豈不知其真有那之真

無那々無之畫其香而少之留其影而遺之畢竟
鏡花水月觀非實相觀奈々何遂其色香那
蓋高低疏密之姿繁度參差之態即是挿者
着心々々所在焉活存斯帖此真活花式也傳百年
而無々無一瓶之不可為式者也乎愛瓶花而昧插
法又將學之乃贅一絶以為跋
四時百種巧収儲姿態交妍々永不枯休遂色
香談實相瓶花圖好護真如
嘉々永癸丑新正　春樵隠士

壽榮園翁所著活華手引種後篇成使余淨寫
焉余固不解挿花之術然其言醇正拾於諶古之道
豈敢代容喙及手固役然應其請點竄假字助語
之失而淨寫以贈時嘉永癸丑上浣

皋𪍿園河北真彥識

余寫花式圖自第三紙至十八紙適會有故而不果遂使
梅可生代寫全其功如生者可謂能彌縫其闕也

蟻生文雄

活花式圖自十九紙至卅一紙余所代蟻生兄也用筆陋拙自視
赧然諺云代大匠斲者傷其手其之謂乎

梅可生東皋